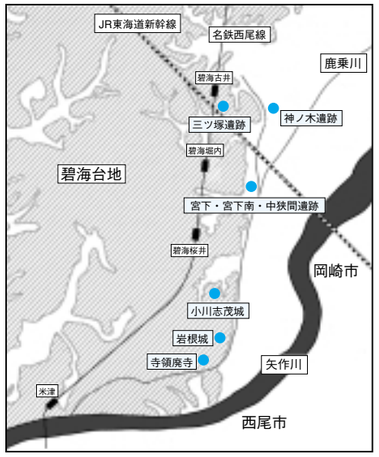
よみがえる！原始～中世の安城

～平成13年度遺跡発掘調査の結果から～



昨年度、古井遺跡群を中心に多くの遺跡の発掘調査を行いましたので、いくつかの遺跡を取り上げ、明らかになったことを紹介します。

なお、寺領廃寺と神ノ木遺跡の調査では現地説明会を行い、たくさんの見学者が訪れました。今後も、皆さんのお住まい付近で発掘調査が行われる際は、ぜひ見学に来てください。

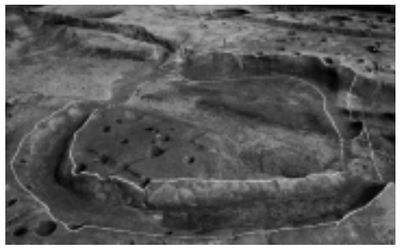
発掘調査は、他の地域との結びつきなどを知り、安城の昔の姿を探る貴重な手段の一つです。これからもご理解ご協力をお願いします。

寺領廃寺の現地説明会

神ノ木遺跡の現地説明会

神ノ木遺跡（古井町・安城町）

弥生時代後期の方形周溝墓が５基見つかりました。このことにより、この地が弥生時代後期における墓域として利用されていたことがわかります。その内の１基から、鳥の絵が線刻された土器が出土しました。鳥の絵が土器に線刻された事例は、全国でも数例あるだけで大変貴重な資料です。また、室町時代の集落跡も見つかっています。溝・井戸・火葬施設があり、土製の鍋・釜などが多く出土しました。中世の集落が良好な状態で残っていることは珍しく、西三河における中世集落のありかたを考える上で重要な遺跡となりました。


方形周溝墓

鳥の線刻

中世の井戸

三ツ塚遺跡（古井町）

奈良時代の竪穴住居跡５棟、掘立柱建物跡１棟と溝が見つかりました。竪穴住居跡は、１辺が約４mの方形で、北・西壁には煮炊きを行うカマドが備え付けられていました。また、溝からは、須恵器と呼ばれる土器が大量に出土。中には円面硯と呼ばれるすずりの一部も見られ、文字を使用できる人々が住んでいたことが想像されます。

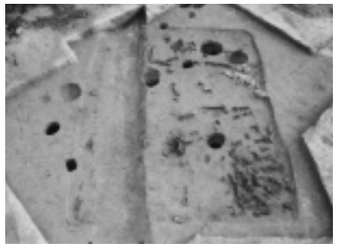
奈良時代の竪穴住居跡

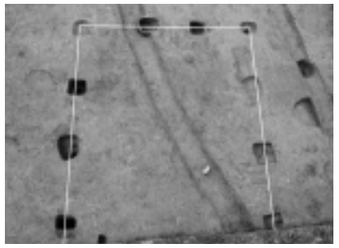
宮下遺跡・宮下南遺跡・中狭間遺跡（桜井町）

弥生時代前期の墓である土器棺墓が見つかりました。墓域が見つかったことにより、古井遺跡群では、弥生時代前期から集落が展開されていたことが明らかになりました。

また、弥生時代中期の竪穴住居跡が１棟見つかっています。弥生時代の住居跡としては、西三河では最古となる発見のため、大変重要な遺構となりました。奈良時代には、掘立柱建物群が広がっていたようです。同時期の溝から墨書土器や円面硯が出土しています。

弥生時代前期の土器棺墓


弥生時代中期の竪穴住居跡


奈良時代の掘立柱建物跡

小川志茂城（小川町）

根石が置かれた柱穴のほかに、城に伴う可能性が高い16世紀の溝が見つかりました。敷地内を区画する溝だったのかもしれません。溝からは、鍋や釜などの生活用具が出土しました。

16世紀の溝

岩根城（小川町）

井戸や東側に落ちる地形が見つかりました。調査地点が城の北東角にあたるため、城に伴う堀の肩である可能性が考えられます。

堀の可能性のある落ち込み

寺領廃寺（寺領町）

寺領廃寺の心礎・礎石が見つかりました。松韻寺の礎石として転用されていたようです。掘立柱建物跡が２棟見つかりましたが、あまり大きな規模ではないため、寺領廃寺の付属施設であったと思われます。

掘立柱建物跡